

杜甫「兵車行」『鬼哭啾啾』考

安立典世

(一) 「哭」と「啾啾」について

戦争という究極の地獄を描いた杜甫の「兵車行」。玄宗皇帝の御世、国土拡大のための戦争が相次ぎ、おびただしい戦死者、のしかかる重税という暗澹たる時代の中、杜甫は詩業の限りを尽くして、民衆の窮状を訴えた。

車轆轤 馬蕭蕭
行人弓箭各在腰
耶孃妻子走相送
塵埃不見咸陽橋
牽衣頓足闌道哭
哭声直上干雲霄
道旁過者問行人
行人但云点行頻

車轆轤 馬蕭蕭
行人の弓箭各々腰に在り
耶孃 妻子 走りて相ひ送り
塵埃に見えず咸陽橋
衣を牽き足を頓し道を闌りて哭し
哭声直ちに上りて雲霄を干す
道旁の過ぐる者行人に問へば
行人但だ云ふ点行頻りなりと

(中 略)

信知生男惡 信に知る男を生むは悪しく
反是生女好 反つて是れ女を生むは好きを
生女猶得嫁比鄰 女を生まば猶ほ比鄰に嫁するを得るも
生男埋没隨百草 男を生まば埋没して百草に隨ふ
君不見青海頭 君見ずや青海の頭
古來白骨無人收 古來白骨人の收むる無く
新鬼煩冤旧鬼哭 新鬼は煩冤し旧鬼は哭し
天陰雨湿声啾啾 天陰り雨湿るとき声啾啾

この作品に対して、清の沈徳潜は以下のような評を残している。「以人哭起、以鬼哭住。照応在有意無意。章法最奇。(人の哭するを以て起こし、鬼の哭するを以て住む。照応有意無意に在り。章法最も奇なり。)」
冒頭は出征する兵士を見送る父母らの姿があり、愛する

者が兵隊へとられていく悲しみを哭している。視覚が塵埃によって遮られている中、人々の声は天に満ちあふれ、悲鳴が空間を覆い尽くす。一方末尾は、白骨や遺体が降り注ぐ雨にうたれるという凄惨な描写の上に、鬼の哭声が覆い被さるようにして締めくくられる。生者と死者の哭声が呼応して作品世界をまとめあげており、哭声が重要なモチーフであることがよく分かる。だが、従来の研究の中で、その具体的なイメージが詳しく論じられることはなかったように思う。果たして鬼の哭声はどのような声なのだろうか。こんな思いを持ちながら、簡単な授業を展開したことがある。高校二年生にたった2時間の授業であった。内容をざっと踏まえた後、次のような質問を投げかけた。

問一（出兵兵士に対して）家族はどう描かれているか。

問二 出兵兵士のおかれた状況はどのようなものか。

問三 鬼の哭す「啾啾」とはどのような声か。

すると、問一、二を確認する過程で、生徒は家族と戦死者が対比的に描かれていることに気づき、「啾啾」を死者の単なる不気味なうめき声とは捉えなくなる。問三に対する生徒の答えをいくつか挙げる。

○雨がしとしと降っているときの雨音のような音。

○しくしくと静かに泣いている。静かだけどその泣き声には家族を残して戦争にかり出され戦死してしまったことへの無念、悲しみ、国への恨みもこもっている。「大声」というより、心が張り裂けるような悲痛な泣き声なのだろう。○ため息に似た泣き声。「天陰雨湿」に響いているものだから、ジメジメしていて重々しい空気が漂っていると思う。○兵士の霊が重なっているため泣き方も様々で静かにすすり泣く声もあれば、怒号のように喚き散らす声もある。それが雨のようにたくさん音（声）となって聞こえている。○悲しみや嘆きなど様々な感情がごちゃ混ぜになった声。家族と引き裂かれ、戦争で苦しんだ兵士やまるで動物のように駆り立てられて悲しく散った人々がたくさんいるから、多すぎて声があわさり、不協和音のような響き。

生徒の意見からは、雨が大きく「啾啾」のイメージに影響していることが伺われる。「兵車行」には雨の降り方は具体的には描かれていないが、多くの生徒はしとしと降る雨をイメージしつつ、とめどなく落ちる雨粒と無数の死者の声を重ねている。「天陰雨湿」からの連想であるのだろう。手に入りやすい日本語の注釈を見ても、「啾啾」の捉え方は様々である。以下に主なものを示す。

①松枝茂夫編 『中国名詩選』⁽¹⁾

空くらく雨のしとしと降る時など、ヒーヒーとむせび泣く声¹が聞こえてくるというではないか。

②黒川洋一著 『鑑賞中国の古典 杜甫』⁽²⁾

新しい亡霊どもはもだえうらみ古い亡霊どもはなきさげび、天のくもり雨のしめるとき、しくしくと泣き声をたてている。

③川合康三編 『新編中国名詩選』⁽³⁾

死んだばかりの亡霊は煩悶し、古い亡霊は慟哭し、そのすすりなく声は空曇り雨湿るなかに悲しげに響くのを

注…兵士に追いつが家族の姿のリアルな映像から始まった詩は、新旧戦死者の恨みの声という凄まじい音の響きで結ばれる。

④下定雅弘、他 『杜甫全詩訳注』⁽⁴⁾

雨のそば降る日には、痛ましくむせび泣く彼らの声が聞こえてくるのです。注…痛まじげな声を表す暈字の擬音語

雨音に重ねた「しくしく」「すすりなく」という訳がある一方で「なきさげび」や「凄まじい響き」という解釈を生む背景には、「哭」の字義そのものからの連想がある。

「哭」について『説文』の徐鍇の注には「哭声繁、故従二口。大声曰哭、細声有涕曰泣。」とある。口が二つある「哭」は「大声で泣き叫ぶこと」であり、小声は「泣」と書いて区別する。「哭」の字義に対して「しくしく」という泣き方はいかにも弱く、訳に反映するのは困難であるのだろう。

(二) 「鬼哭」について

ところで、「啾啾」を考える前に、そもそも鬼は哭すのか。実は「鬼哭」という表現は古くからあり、『史記』の天官書にも見えているが、宋の杜修可は『後漢書』陳寵伝(郭陳列伝三十六)を引いている。

先是洛陽城南、每陰雨常有哭声聞於府中、積數十年。寵聞而疑其故、使吏案行。還言、世衰亂時、此下多死亡者、而骸骨不得葬、儻在於是。寵愴然矜歎、即勅果尽收斂葬之、自是哭声遂絶。

是れより先洛陽城南、陰雨ある毎に常に哭声有りて府中に聞こえ、積むこと數十年なり。寵聞きて其の故を疑ひ、吏をして案行せしむ。還りて言ふ「世の衰亂せし時、此の下に死亡する者多きも、骸骨葬らるるを得ず、儻しくは是

に在らんか」と。寵は愴然として矜れみ歎じ、即ち県に勅して尽く収斂して之を葬らしむ。是れより哭声遂に絶ゆ。

このエピソードには「骸骨」と「哭声」および「陰雨」という「兵車行」で重要なモチーフがすべて揃っている。また、後漢王充の『論衡』には以下のような記述がある。

枯骨在野、時嗚呼有声。若夜聞哭声、謂之死人之音非也。何以驗之。生人所以言語呼者、氣括口喉之中、動搖其舌、張歛其口。故能成言。(中略)人死口喉腐敗、舌不復動、何能成言。然而枯骨時呻嗚者、人骨自有能呻嗚者焉。

枯骨の野に在るや、時に嗚呼して声有り。夜哭声を聞き、之を死人の音と謂ふがときは非なり。何を以てか之を驗する。生人の言語呼する所以の者は、氣口喉の中に括られて、其の舌を動揺し、其の口を張歛す。故に能く言を成す。(中略)人死して口喉腐敗すれば、舌復た動かさず、何ぞ能く言を成さん。然り而して枯骨の時に呻嗚するは、人骨に自ら能く呻嗚する者有ればなり。(論死六二)

人がしゃべるのは舌があるからで、死んだら口喉は腐ってしまふのだから、死者が哭すなどありえない、白骨はも

ともと音を立てる性質があるのだと王充はいう。こういう反駁があることから、「鬼哭」がしばしば人の口の上でいたことが知られる。また、なぜ鬼が哭すのかについては王融「永明九年策秀才文五首」(『文選』卷三六所収)の李善注は鄭玄を引いて以下のようにいう。

肺石少不冤之民、棘林多夜哭之鬼

肺石に不冤の民少なく、棘林に夜哭の鬼多し。

李善注・尚書旋璣鈴曰、鬼哭、山鳴。鄭玄曰、鬼哭誅無辜也。山鳴聽不聰之異也。

尚書旋璣鈴に曰はく、鬼哭し、山鳴ると。鄭玄曰はく、鬼哭すは、無辜を誅すればなり。山鳴るは、聴くこと聰ならざるの異なり、と。

こうしてみると、鬼が哭くのは、無実の罪で誅殺されたからだという見解が一般化していたようだ。これを受けてか、盛唐、辺塞詩が流行し、国土拡大にともなう匈奴との争いが激化していく中で、「鬼哭」は流行のモチーフとなる。

塞下曲其三

常建

1 竜門雌雄勢已分

竜門

雌雄の勢

已に分かる

2 山崩鬼哭恨將軍 山崩れ鬼哭して將軍を恨む

〔全唐詩〕一四四

武威送劉單判官赴安西行營便呈高開府 岑參

37 夜靜天蕭條 夜靜かにして天は蕭條たり

38 鬼哭夾道傍 鬼は哭す夾道の傍

39 地上多髑髏 地上髑髏多し

40 皆是古戰場 皆是れ古戰場 〔全唐詩〕一九八

同李員外賀哥舒大夫破九曲之作 高適

5 奇兵邀轉戰 奇兵は轉戰を邀ふ

6 連弩絕歸奔 連弩は歸奔を絶つ

7 泉噴諸戎血 泉は諸戎の血を噴き

8 風驅死虜魂 風は死虜の魂を驅る

9 頭飛攢万戟 頭は飛びて万戟に攢り

10 面縛聚轅門 面縛して轅門に聚る

11 鬼哭黃埃暮 鬼は哭す黃埃の暮

12 天愁白日昏 天は愁ふ白日の昏 〔全唐詩〕二一四

戦地や死体の描写と無念の死をとげた鬼が哭すという状況をセットにして描くのが当時の流行であったことがよく

分かる。高適の作品に到っては、血しぶき、生首など描写は生々しく、杜甫の「兵車行」もこうした流れの中にあるものだといえるだろう。

(三)「啾啾」と「猿声」について

続いて「啾啾」の語自体がどのように用いられてきたかを確認しておきたい。「啾啾」は『楚辞』以来の古い伝統を持つ語であり、猿、鳥、虫等の鳴き声、玉が重なり合う音など内容的には多岐に渡る汎用性の高いオノマトペではあるが、おおざっぱに言えば、小さな音が寄り集まっている様を表現する。「兵車行」の典拠として、『九家集注杜詩』は『楚辞』「九歌山鬼」の以下の部分を挙げている。

雷填填雨冥冥 猿啾啾兮狢夜鳴

雷は填填として雨は冥冥 猿は啾啾として狢は夜鳴く

(※『楚辞集注』に、啾、小声とある)

雨と猿と啾啾である。「楚辞」をうけて『文選』にも多様な用例があるが、音のイメージをつかむのに晋・成公綏の「嘯賦」(『文選』巻一八)が興味深い。

逸気奮湧、繽紛交錯。列列飄揚、啾啾響作。奏胡馬之長思、向寒風乎北朔。又似鴻鴈之將鷁、群鳴号乎沙漠。

逸気奮湧し、繽紛として交錯す。列列として飄のごとく揚がり、啾啾として響きのごとく作る。胡馬の長く思ひ、寒風に北朔に向かひて奏す。又鴻鴈の鷁を将ゐて、群れて沙漠に鳴号するに似る。

嘯きの声を形容したのだが、それは、胡馬が思いを込めてなく音だったり、渡り鳥が雛をつれて飛び、沙漠の空で群れて鳴き交わすかのような音だったりする、ということとで、「啾啾」は、馬のいななき、渡り鳥の群れの鳴き声から想起される高い音であったことが推察される。

さて、このように古くからの伝統をもった「啾啾」は、唐代においても多用されるが、特に筆者がここで取り上げたいのは猿の声に結びついているものである。⁽⁵⁾

宿空舂峽青樹村浦 陳子昂

- 1 月的明月水 的的たり明月の水
- 2 啾啾寒夜猿 啾啾たり寒夜の猿
- 3 客思浩方乱 客は思ふ浩方の乱
- 4 洲浦寂無喧 洲浦寂として喧しき無し（『全唐詩』八四）

箜篌引 王昌齡

- 1 盧谿郡南夜泊舟 盧谿郡の南 夜舟を泊す
- 2 夜聞兩岸羌戎謳 夜聞く兩岸 羌戎の謳
- 3 其時月黑猿啾啾 其の時月黒くして猿啾啾
- 4 微雨霑衣令人愁 微かな雨は衣を霑し人をして愁へしむ
- 5 有一遷客登高樓 一遷客あり高樓に登る
- 6 不言不寐彈箜篌 言はず寐ねず箜篌を弾く
- 9 將軍鉄驄汗血流 將軍 鉄驄 汗血流る
- 10 深入匈奴戰未休 深く匈奴に入りて戦未だ休まず

これらの用例において、「猿」「啾啾」と「戦乱」「別離」「悲哀」とは和歌の縁語のようなイメージの連鎖を生む。松浦友久氏は以下のようにいう。

猿声を詩材（より広くは、文学的表現の素材）とする態度（ないし認識）が一般化するのは、ほぼ三国から南北朝初期にかけてであることが確かめられよう。以下、猿声自体の頻用化とともに、それを「哀・悲・寒・孤・夜・涙・清」といった一定の方向性をもつ語彙によって形成すると

いう傾向は、さらにはつきりと認められる。(中略)

このような前代までの経緯を承け、唐代の詩歌には、猿声⁶⁾をうたうものが極めて多い。

「猿の声が悲しい」という認識である。それはもちろん猿の鳴き声そのものが哀愁をおびた音であることが前提であるわけだが、その大きな根拠となっているのは「断腸」(『世説新語』黜免)の故事であろう。

桓公入蜀、至三峡中、部伍中有得猿子者。其母縁岸哀号、行百余不去。遂跳上船。至即便絶。破視其腹中、腸皆寸寸断。公聞之怒、命黜其人。

桓公蜀に入る、三峡中に至り、部伍の中に猿の子を得る者有り。其の母岸に縁りて哀号す、行くこと百余なるも去らず。遂に跳びて上船す。至らば即ち便ち絶ゆ。破きて其の腹の中を視るに、腸皆寸寸に断えたり。公之を聞きて怒り、命じて其の人を黜かしむ。

猿の母が子を追いかけて哀号して死んでいった。猿の鳴き声をイメージするときに、必ずそこには腸を断つほどの肉親への強い愛情が重ならずにはいないのである。

(四) 王翰の作品との関連について

さて、ここから「兵車行」に戻る前にもう一つ、星川清孝氏の見解を踏まえたい。

(兵車行の)「鬼哭啾啾」の語は、戦争の犠牲になった多くの亡霊の悲しみを表す語であって、同じく盛唐の詩人李華の「古戦場を弔ふ文」(古文真宝後集所収)に「常て三軍を覆して往々にして鬼哭す。天陰れば則ち聞ゆ、と。心を傷ましむるかな。」とあり、本書後出の王翰の「古長城の吟」に「黄昏塞北に人煙無し。鬼哭啾啾として声天に沸く。罪無きも誅せられ功あるも賞せられず、孤魂流落す此の城辺。」とあるのもまたこれと同じ思想である。⁷⁾

この指摘をもとに、右の書で「兵車行」の先駆とされる王翰の作品を見ていく。「古長城吟」は「飲馬長城窟行」の題で『全唐詩』巻一五六に収められており、それを示す。

- 1 長安少年無遠図 長安の少年遠図無く
- 2 一生惟羨執金吾 一生惟だ羨む執金吾
- 3 麒麟前殿拜天子 麒麟前殿に天子に拜し

4 走馬西擊長城胡 馬を走らせ西のかた長城の胡を撃つ
(中 略)

7 遥聞擊鼓動地來 遙かに聞く擊鼓の地を動して来るを

8 伝道单于夜猶戰 伝へ道ふ单于夜猶ほ戦ふと

9 此時顧恩寧顧身 此の時恩を顧みるも寧ぞ身を顧みん

10 為君一行摧万人 君が為一行きて万人を摧く

11 壯士揮戈回白日 壯士戈を揮ひて白日を回らし

12 单于濺血染朱輪 单于血を濺せて朱輪を染む

13 歸來飲馬長城窟 歸り來りて馬に飲ふ長城の窟

14 長城道傍多白骨 長城の道傍白骨多し

15 問之耆老何代人 之を耆老に問ふ何代の人なりやと

16 云事秦王築城卒 云ふ秦王に事へし築城の卒と

17 黄昏塞北無人煙 黄昏塞北人煙無く

18 鬼哭啾啾声沸天 鬼哭啾啾として声天に沸く

19 無罪見誅功不賞 罪無く誅せられ功あるも賞せられず

20 孤魂流落此城辺 孤魂流落す此の城辺

王翰の作品には、武功にはやる若者と対置して、築城の
労役の下、空しく死んでいった人びとの魂が哭す様子が描
写されている。「兵車行」の鬼は戦死者なので鬼の正体は
異なる。だが、字句の上ではよく似通っていて、杜甫の

「鬼哭」と「啾啾」の結びつきの着想は王翰を引き継いで
いると思われる。杜甫より年長の王翰は、当時大詩人とし
て名を馳せていたから、この作品も世間に知られていたで
あろう。王翰の詩において、鬼の声は天に満ち、無数の死
者の声が天にむかって沸き立つ。おびただしい鬼の魂がわ
あわあと騒ぎ立て、空間全体に鬼の泣き声が充満している
様子が読み取れる。そして、その泣き声は長城建設に動員
され、功名成らず死んでいった無実の死者の恨み言だ。
『文選』の李善注を受けたある種類の「鬼哭」だとい
えよう。

一方「兵車行」では、冒頭の場面で「哭声直上」とあ
ったように、天に満ちていたのは生者の哭声で、出征兵士
を見送る、ただただ愛しい人を思つて叫ぶ声であった。杜
甫の「鬼哭啾啾」は王翰の後発であり、字句を丸ごと借り
ているようにさえ見えるのだが、王翰作品では、鬼の悲し
みの内容が、これまで繰り返し詠われた典型的パターンを
踏襲するのに対し、杜甫の「兵車行」は、見送る肉親の哭
声に鬼哭を対置することで、肉親を求めて哭く鬼の声とい
う意味合いが強調されている。鬼哭が家族への思いと結び
ついて示されることが、辺塞詩の流れのなかでいかに新奇な
ことだったかが、改めて理解されるだろう。

そしてそのことがまさに、杜甫の「啾啾」が王翰の引き写しではなく、『楚辞』以来の伝統の中で、唐の詩人たちが猿の鳴き声としてしばしば用いた「啾啾」であり、ふるさとや肉親を思う声の象徴としての「啾啾」であったことを証明しているのではなからうか。兵士を見送る肉親の哭声に対して鬼の哭声を置いた、人びとの愛情を軸に生者と死者を呼応させたその大胆な仕掛けそのものが、「啾々」の語に対して、肉親と引き裂かれて哀号する猿の高く寂しい声のイメージを重ねていくのである。

そして「兵車行」の末尾は、うち捨てられた白骨、新旧死者、そこに重なる「啾啾」の声と大変衝撃的な描写で締めくくられる。ただし、辺塞詩の中には血しぶきや生首などグロテスクな表現を極めようとしたものもみられたが、杜甫の「兵車行」は少しばやかした印象が残る。その印象を強く醸し出しているのが、「天陰雨溼」の語句であろう。最後に杜甫は読者の視界を暗く閉じていき、鮮明に浮かんだ戦場の凄惨なカットが、雨雲によってぼんやりと陰っていくのである。そこで、読者は奪われた視界に対して、聴覚でもって鬼の声を聴く。そしてその声は長く読者の耳に響き続ける。出だしでは、追いかける家族たちが立てる塵埃のなかで、風景が霞んだ。最後は雲や雨によって視界が

ばやけていく、その中で無数の死者の嗚咽がそこから中から聞こえてくるのである。まるで映画のエンドロールだ。

(五) 革新者杜甫が描いたもの

杜甫が「兵車行」で描きたかったのは、確かに戦場の悲惨さだった。しかし、本当の焦点は無残な遺体でなく、戦乱に翻弄される民衆の悲しみそのものにあたっている。冒頭で出征する兵士を見送るものの悲しみを、そして末尾では、愛するものを残して死んでいく兵士の悲しみをうたうのだ。そう思うと杜甫が描きたかったのは、まさしく悲しみの「声」なのであって、「兵車行」の末尾が「啾啾」という音で終わるのも納得できる。民衆たちは言葉を持っていない。「兵車行」の中盤にはこんな象徴的な言葉がある。

長者雖有問、役夫敢申恨。

長者問ふ有りと雖も、役夫敢て恨みを申べんや。

生者でさえお上に不平不満など申せない。まして腐り果てた戦死者はすすり泣くのみ。その声にならない哭声を杜甫は作品の最後においたのだ。「兵車行」の最後の場面には不思議な静けさが漂っているとも言える。泣き叫んで天

に届くような鬼声よりも、しくしく泣く鬼のほうはずっと哀れだ。杜甫は鬼の哭くシーンにそば降る雨を重ねあわせることで、悲しみすらも抑圧されている様を表現している。王翰の表現を踏まえつつも、そこに〔後漢書〕の記述にもすでにモチーフはあったが、雨を重ねることで、杜甫は王翰の表現を乗り越えていたのではなからうか。

戦争で死ぬものは無数。無数の鬼が泣く。この光景自体は、当時流行した辺塞詩と同じモチーフである。しかし「兵車行」の読者は、その無数の鬼の一つ一つに愛する家族がおり、骸の一つ一つにそれぞれの人生があつたと考えることができる。辺塞詩の中ではのっぺらぼうだった死者の姿は、「兵車行」において顔を持つ。類型的な一般化された戦争を描くのではなく、民衆一人一人の悲哀を杜甫は詠った。「啾啾」は一人一人の戦死者がかげがえのない肉親を思って哭く悲哀に満ちた音であつた。伝統的なモチーフを巧みに用いながらも、杜甫はここでも確実にその伝統を乗り越える革新者として、民の哀しみを詠い上げていたのである。

最後に、授業後の生徒の感想を紹介して結びとする。

〳〵皇帝や役人からしたら兵士や家族たちは一つの塊として道具のように扱われるが、兵士一人一人や家族たちから

するとその一つ一つの命はとても大切なもので唯一の存在であつたことが感じられた。徴兵される側や重税を課せられる一般市民の苦しみや哀しみが「啾啾」の音からイメージできた。戦死した兵士のもう聞かれることのない嘆きで終わっていることで、同時に夫を兵隊にとられ、重税に思い悩む残された人びとの声に出せない苦しみも伝わってきた。誰に知られることもない寂しい死が多く、哀しみを集めて胸に迫ってくる。

注

- (1) 松枝茂夫編 一九八四 岩波文庫
- (2) 黒川洋一 一九八七 角川書店
- (3) 川合康三編 二〇一五 岩波文庫
- (4) 下定雅弘、他 二〇一六 講談社学術文庫
- (5) 本論では猿声のみに題材を絞ったが、「木蘭詩」〔古詩源〕に「不聞爺嬖喚女声 但聞燕山胡騎声啾啾」という表現がある。これは馬の声で、「啾啾」に別離、戦争が重なる。今後の追究課題としたい。
- (6) 『詩語の諸相 唐詩ノート増訂版』（松浦友久 一九九五 研文出版）

- (7) 『古文真宝前集』（星川清孝 一九六七 明治書院新釈漢文大系）

（浜松湖南高等学校）